

cafe talk_04

ゲスト 西川亮さん デザイナー
芝田陽介さん グラフィックデザイナー



04号の制作に関わったクリエイターと、enocoスタッフによるカフェトーク。写真からうまく伝わるかが不安ですが、かなり真面目な話をしています…。

- Co.to.hanaさんの活動というのは本当にかなり幅広いですよね。
- 西川 そうですね。広義のデザインというか、プロジェクト型のもも多いです。実は(特集に登場する)永田さんの活動にも凄く影響も受けてます。学生時代にインターンをさせてもらって。
- そうなんです!今回デザインしていただけて、まさにご縁というか!
- 芝田 僕はもともと商業デザインをやっていたんですけど、東日本大震災のときに「これじゃアカンな」と思って、もっと人に近いというか社会のためにすることをやろうと思い始めて、2011年の夏からCo.to.hanaに。
- 阪神大震災が転機になった方が、いま関西では中堅で活躍されてますね。
- 西川 東日本がきっかけで、という人もこれからもっともっと増えると思います。日本全体が結構変わってきている感じはしますね。僕らはもちろんですけど、石巻のプロジェクトに関わっている高校生たちも、会社を立ち上げたりしてホント凄くて、これからどういふ大人になっていくのか楽しみです。

NPO法人Co.to.hana(NPOほうじんことはな)

社会が抱える課題に取り組むデザイン事務所として、まちづくり、建築、空間、インテリア、プロダクト、グラフィック、WEBサイト、映像、イベントの企画・運営・制作など、分野にとらわれず総合的にデザインを行う。主なプロジェクトに『みんなのうえん』『いしのまきカフェ』『かざかっこ』など。

西川亮(にしかわりょう)

1986年大阪府出身。NPO法人Co.to.hana 代表/デザイナー

芝田陽介(しばたようすけ)

1978年福井県出身。NPO法人Co.to.hana グラフィックデザイナー



ninOval cafe

enoco地下1階 営業時間:11:00-18:30(月曜日定休)

ふわふわのパンケーキ、ますます人気上昇中です!

関西テレビ「よーいドン!」のグルメコーナー「おすすめ3」の中で、スイーツレポート・染川ひろさんのオススメ「人気店のこだわりスイーツ」にninOvalのパンケーキが登場し大反響! 貸切・パーティー・忘年会・新年会・歓送迎会も受付中です。キッチンカーでの出張販売も承ります!



enokojima creates osaka
enoco

大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]
Enokojima Art, Culture and Creative Center,
Osaka Prefecture

アートやデザインの創造力で、都市を元気にすることを目指し2012年4月にオープン。展示室や多目的室のレンタル事業を行うほか、企画展や公演、セミナー・ワークショップなどを開催し、クリエイティブな人や情報が行き交うプラットフォームとなることを目指しています。

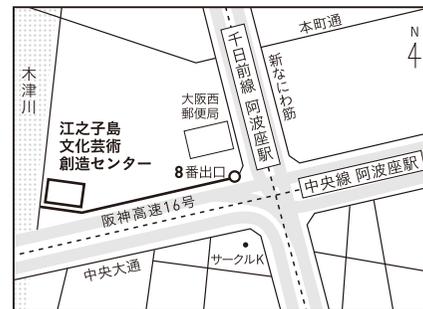
〒550-0006 大阪市西区江之子島2丁目1番34号
開館時間:10:00~21:00(ただし展示室は11:00~19:00・日曜日は11:00~16:00)

月曜・年末年始休館
電話:06-6441-8050|FAX:06-6441-8151
メール:art@enokojima-art.jp

www.enokojima-art.jp

[アクセス]

大阪市営地下鉄千日前線・中央線「阿波座駅」下車、8番出口から西へ約150m。徒歩約3分。



enocoニュースレター 04
2015年1月発行

- |発行| 大阪府立江之子島文化芸術創造センター
 - |編集| 峯恵子(enoco 企画部門)
 - |アートディレクション| 西川亮、芝田陽介(NPO法人Co.to.hana)
 - |デザイン| 浜田善(000 Projects)
 - |撮影| 芝田陽介(表紙、p.2-p.5)
 - |イラスト(エノケン、似顔絵)| タグキヒロ
- 「enocoニュースレター」は、enocoが年4回発行する情報誌。enocoで起こっていることや、enocoにかかわる人々が日々考えていることをお伝えしていきます。

江之子島文化芸術創造センター — enoco ニュースレター — 2015 — 04

enoco 04



「場」をつくる

KIITO

enoco

2-1-34, Enokojima
Nishi-ku Osaka-shi,
Osaka, 550-0006,
Japan

04号の表紙について

写真とデザイン | NPO法人Co.to.hana

江之子島文化芸術創造センターenocoがお送りする「enocoニュースレター」。表紙と巻頭は、毎月異なる大阪のクリエイターたちが担当します。04号では、KIITOとenoco、関西圏のデザインセンター・アートセンターの顔ともいえるお二人の姿を、幅広い分野で活動する次世代、NPO法人Co.to.hanaのお二人がデザイン。関西圏の地図上で大阪と神戸の「場」と「人」を表現した表紙となりました。ちなみにニュースレター看板犬のエノケンが座っているのは淡路島です。

www.enokojima-art.jp

江之子島文化芸術創造センター — enoco ニュースレター — 2015 — 04



中立公平(なかだちこうへい)

1966年大阪生まれ。音楽家、俳優、演出家を経て、KIO芸術監督に就任。都市における祝祭空間の演出を研究、フェスティバルシティの運営戦略マネジメントに取り組む。文化芸術観光を行政経営活性化における最重要課題として捉え、劇場やカフェなど文化的な街の場づくりを実践。現場と運営両面における観点から公職での提言も行っている。最新作は「ファウストの恋人」(2015年1月4日@オリックス劇場)。

境界を越えていく -人と人が出会う場所

江之子島とのご縁は館長の甲賀さんと出会ったことです。静岡で面白いことを色々と手がけておられると聞き、「エネルギー純度の高い人がいるなあ」と思い、甲賀さんと江之子島で再会を果たしてからは大阪を面白くすることを共に仕掛けています。この連載をリレーしてきた忽那さんや嘉名さんにも江之子島で出会いました。同世代で街を考えている人たちがこんなにいるなんて以前は全く知りませんでした。これだけでも江之子島は出会いの場として十分機能していると言えます。そこから新しいものが生まれている。「人と人が出会う」、このことは私の興味の源泉でもあります。私は演出家なので、演劇や劇場という人が出会う場にいつもいます。一方でタクトフェスティバルという国際的なパフォーミングアーツのフェスティバルを手がけています。これも世代や国境を越えて人が出会う場所をプロデュースしているわけです。また、カフェもプロデュースしています。カフェは「人が語り合い、出会いを育む場」という観点から、カフェが街のメディアとして広がっていくことを目指しています。これらに共通する活動のテーマは「境界を越えていく」ことです。あらゆるジャンル、障壁、国境など人と人を分かつ仕組みを越えていくことです。演出家としての新作「ファウストの恋人」もそうした発想から生まれました。これは、大阪市音楽団という吹奏楽団(フルオーケストラ)・俳優・サーカスアーティスト・大道芸人・ダンサー・エアリアルダンサーがコラボする壮大な作品です。障害を持った人も含め、いろんな身体が舞台上に舞い踊ります。ここに美術や空間デザインや映像が加わり、まさに総合芸術スペクタクルと呼ぶに相応しい作品となりました。人が人と出会うことで起こる一番顕著な現象は、明らかに何かが活性化することです。祝祭も劇場も江之子島も突き詰めれば、人や都市を活性化するためにあるのです。自分を変えるためにさまざまな書物やセミナーがありますが、それなら芸術に出会えばいいのになあと私は思います。芸術は難しいものじゃない、それは出会いです。新たな出会いのためにいつも開かれている窓なのです。



クールジャパンデザイン

アニメに漫画、プラモにゲーム、日本のオタク&サブカルチャーをデザイン目線で読み解く一冊!

This is San Francisco

イラスト、レイアウト、タイプグラフィ、大人も見ななきゃもったいない、とっても可愛い名作絵本です。ケーブルカーが主役となってサンフランシスコの街を案内します。

NAOTO FUKASAWA

ロングライフデザインをお探しならこれ。気持ちの良いデザイン製品と、それにまつわるコンセプトも一読の価値あります。

大坂怪談集

くっそ寒い季節に読む怪談話。「御伽人形」「一夜船」などの大坂の怪談を収録しています。凍死注意。

オン★ザ★レビュー

enoco地下1階の古書店「ON THE BOOKS」米田店長によるブックレビュー。アートブック・写真集・デザイン・建築・ファッションからマンガ・音楽・映画・オカルトまで、多彩なラインナップの中から(店長の)今の気分をあらわす4冊をご紹介します。

ON THE BOOKS 営業時間: 11:00-20:00(月曜日定休)

掲載の書籍は店頭・オンラインストアで販売中 www.on-the-books.info



みんなのえのこじま vol.04

堀川すなおさん

アーティスト

sunaohorikawa.com

enocoと関わりの深いクリエイターに、活動内容と江之子島周辺のお気に入りスポットをシェアしてもらったショートインタビュー。第4回は、公募プログラム、enoco[study?]の入選アーティストとして、館内のアトリエで作品制作を行う堀川すなおさん。江之子島、最近どんな感じ?

ー簡単に自己紹介をお願いします。

大阪を拠点に平面作品を制作しています。「もの」が本当はどんな形をしているのを知りたくて、それをドローイングで探っています。ものの名前を聞いてすぐに頭の中に浮かぶ形と実際のものの形には違いや同じところはあるのか…というようなことも気になっています。

ーenocoでの制作と、ご自宅のアトリエでの制作とで違うところはありますか?

今回、初めて開かれたスペースで制作をするということで、ワークショップをしたり、アトリエ見学に来てくれる学生さんや自分以外の作家さんにいろいろアドバイスをいただいたり、制作途中の作品を関西の学芸員の方々にみていただく中間レビューをしたりということで、アトリエにいろんな人がやってきます。普段は一人で一つのものど何ヶ月も向き合って絵を描いているので、本当に新しいことばかりで刺激を受けています。

ーenoco周辺のおすすめをひとつ紹介していただけますか?

出不清なので実は一日中アトリエにいて、全然お店とかは知らないです…なので自分の展覧会の宣伝をします(笑)!enocoでの3ヶ月間の制作の成果を1月に発表しますので、よろしくお願ひします!

enoco[study?]#2

堀川すなお 「解釈と行為」

大阪府立江之子島文化芸術創造センター4階ルーム2

会期: 2015年1月10日(土)~1月24日(土)

月曜休、入場料: 無料



エノケンのひとりごと

明けましておめでとうーさんでございませう! 今年もエノコをよろしくたのむで。

「場」をつくる

永田 宏和 (デザイン・クリエイティブセンター神戸 副センター長)
 甲賀 雅章 (大阪府立江之子島文化芸術創造センター 館長)

これからのアートセンター・デザインセンターに求められるものとは？
 神戸のKIITO副センター長と大阪のenoco館長のふたりが、
 それぞれの人生について、そしてアートセンター・デザインセンターの
 役割と可能性について語ります。(聞き手:峯恵子 / enoco企画部門)

何屋でもない人たち

- ㊦ それにしてもそもそも甲賀さんって、何屋さんなんですか？
- 甲 いろんな人にけっこう聞かれますね。アートディレクター、プロデューサー、色々あるけど、僕自身としては、広い意味でのデザインというのを生業にしている、デザイナーだと名乗ってます。「新しい価値を作る」なんてカッコいいこと言ってるんですけど、つまり手を動かすデザイナーではなくて、どちらかといえば口と脳を動かしているわけ。
- ㊦ なるほど。でもお話を聞いていると、チャレンジ精神が凄いですよね。僕はパフォーミングアーツを自分でやろうっていう感じにはならないですもん。
- 甲 60ぐらいになったらそうなりますよ。
- ㊦ いや～どうなのでしょう(笑)。でもそういう年の重ね方って懂れます。僕はもともと建築出身ではあるんですけど、若いころはずっと「お前は何屋やねん」って言われ続けてたんです。自分の中では結構ショックな話だったんですけど、僕はデザイナーでもなし、建築家でもないの、もっともな話ではあるんです。色んなことやってますし。
- 甲 でも永田さんにとっては、やっぱり震災っていうのは一つの大きなターニングポイントですよな。



- ㊦ 震災から10年の節目に神戸市から声がかかったときに、震災のことを改めて考え始めたんです。当時、自分の住んでた西宮も壊滅的にやられたし、自分の家も全壊したし、周りで幼なじみとか友達も亡くなった中で、何もできないまま来ていた10年間だったので、自分の中では何もできへんかったなっていう敗北感みたいなものがずっとあって、もう僕は防災教育をやろう、と決めて、のめり込んだんです。10年経ってできることってやっぱりそれだろうと思って。
- 甲 僕の転機はやっぱりバブルが終わって、ものすごく精神的にも豊かだった広告文化がそれまでと変わり始めたとき。
- ㊦ 広告業界のまったただ中にいらっしゃったし、特に影響が大きかったでしょうね。
- 甲 そう考えるとお互い年齢は違うけど、時代の流れと人生っていうのはやっぱり切り離せない感じがするね。

アートセンター・デザインセンターの役割

- ㊦ enocoとKIITO、アートセンターとデザインセンターっていう違いはありますが、コンセプトとしてはちょっと似てますよね。やっぱり世の中のニーズというか時代感みたいなものもあるかと思いますが。
- 甲 確実にありますね。時代感。でも約3年間やってきて改めて痛感しているのは、我々スタッフだけじゃ基本的に何もできないなということです。クリエイターやアーティストと一緒に動いているっていう状況を作らないと。場づくり、仕掛けづくりっていうのが我々の使命だなと思います。



※1「100 OSAKA」(enoco/2012年、2013年)
 大阪を拠点に活動する様々なジャンルのクリエイター100人がイメージするそれぞれの「大阪/OSAKA」を展示し、従来のステロタイプとは異なるクリエイティブでリアルな大阪を現出させる展覧会。



※2「+(プラス)クリエイティブ・ゼミ」(KIITO/2012年～)
 小グループで行うディスカッションを通して、社会的課題を解決する方策を導き出すプログラム。また、提案されたプランの中から実現性が高く、効果が期待できる案を、関係機関と協議しながら事業化に繋げるコンサルティングを行う。

- ㊦ それはKIITOも、ずっと同じことを考えてきました。まだKIITOがオープンする前に、センター長(芹沢高志さん)と「KIITOはプロジェクトの生産工場になったらいいんじゃないか」という話をして、それはホンマにそうやなと思ったんです。ここにプロジェクトがあることでいろんな人がつながれるし、活躍の場を作れるし、デザインとかクリエイティブで社会の課題を解決できるっていう実績も残せるし、それが結果的にまちを元気にするだろうっていう感覚もあって、プロジェクトを起こすことが僕らの使命なんだろうなって。場所はあの大きい場所を与えられたけれども、僕の関心としてはあそこどういうプロジェクトを起こせるか、場をつくれるかということをはたすら考えてきたんですよ。

- 甲 enocoの場合は、「100 OSAKA(※1)」なんかはまさにクリエイターのつながる場づくりっていうのを考えて企画したんです。やろうと思ったのにはきっかけがあって、僕自身が2012年から大阪で活動するようになって、自分のイメージの中の大阪と、実際の大阪があまりに違うということを実感したわけですよ。実を言うとその大阪にはあんまり来たいと思ったことはなかった。恐いイメージがあったし、どっかかといえば東京行きたいな…みたいなね。でも実際に来てみたらめちゃくちゃ良いわけですよ。人もいいし、食べ物もおいしいし。それでこのギャップを埋めるには、やっぱり大阪をもう一度編集し直して発信しないとなって思ったわけ。それでクリエイターを100人集めて紹介する展覧会を2回やったんだけど、なかなかクリエイター同士の交流とかそういう次のステップにつなげるっていうのは難しいね。

- ㊦ KIITOでも、神戸市の抱える課題について議論して、アクションプランを作って実現につなげる「+(プラス)クリエイティブ・ゼミ(※2)」という試みがあります。もともとはデザイナーとかクリエイターを育成するための企画だったんですが、実際にはそんなところにデザイナーやクリエイターはあんまり出てこない。みんな忙しいですね。それで結局は、高齢者もいれば主婦も高校生もいて、多世代が同じ社会テーマについて考えられるプラットフォームみたいなものになってきています。当初の思惑から外れてはいるんですけど、それはそれで良かったなと思っています。

- 甲 うちの「enocoの学校(※3)」と同じコンセプトかもしれないね。enocoの学校はどちらかといえば若い世代の育成に力を入れているけども。

- ㊦ クリエイターの交流系のものはうまく発展させるのがなかなか難しいなと僕も思うんですが、KIITOで威力を発揮しているのが「ちびっこうべ(※4)」というイベントです。デザイナーやクリエイターが集まって子どもの夢の街をつくるという。もちろん子どもに対する効果は絶大なんですけど、関わったクリエイターがそのあと一緒に仕事をしていたりして、彼らの活動が活性化してるっていうのが実は一番嬉しいですね。実際に関わってみるとすごく大変だと思うんですけど、子ども相手にすると自然に会話が生まれるし、「今日飲みにいこか」みたいな感じでいつの間にかクリエイター同士も仲良くなるって言う。やっぱりそういうのって大事なんですよ。

コラボレーションの可能性

- 甲 実は今、他の施設と連携して何かやってみたいと考えてるんですけど、永田さん、アイデアないですか？
- ㊦ 例えば僕と甲賀さん個人だったら、僕がやってる防災と、パフォーミングアーツのコラボレーションなんかはすぐ思いつきますよね。
- 甲 防災ってコミュニケーションの問題も大きいからね。
- ㊦ 施設同士だと、すでにあるメイン事業の中身を出張させるとか、共同開催するとか…、
- 甲 ……………
- ㊦ あ、違うっていう顔してはるな…(笑)
- 甲 すぐにできちゃうことだと、なんかそうじゃないと思っちゃうんだよね。KIITOとenoco、それぞれの得意分野を組み合わせるとひとつのものを考えてみる、っていうのをやってみたいね。
- ㊦ 確かに、一緒に組んでできない大きなことというか、実験的なこと、チャレンジングなことをやって、「関西おもしろいな」と思ってもらえたらいいですよな。それこそ一緒にお祭りみたいな「場」を設定して、それぞれが関わっているクリエイターの交流というかが協働ができれば。大阪も神戸も社会課題って山積みだと思うんですが、それぞれを拠点にするクリエイターにアイデアを持ち寄ってシェアしてもらおうっていうのはいいですね。シンプルですけど、「ゼミ」を一緒に開催して、それぞれゆかりのあるクリエイターを集めて。
- 甲 小さくてもおもしろい動きは関西でもたくさんあって、それを分散させずにムーブメントにしていくには中心となる核が必要だと僕は思うんです。求心力のあるキーパーソンっていうのも当然必要だけど、KIITOやenocoやが「場」としてその核になっていければいいなと思うんですよ。



※3「enocoの学校」(enoco/2013年～)
 柔軟な発想で新たな価値観を創造するBe Creative!精神で、未来を主体的に変えていくことのできる人材を育成する講義シリーズ。関西圏内外から多彩な講師陣を迎えての講義・ワークショップやフィールドワークと、企画立案・提案力を身につけるワークショップを行う。



※4「ちびっこうべ」(KIITO/2012年、2014年)
 シェフ、建築家、デザイナーの3つの職業に分かれて、小学校3年生から中学校3年生の神戸の子どもたちと、各分野のクリエイターが、食をテーマと一緒にまちづくりを行う2年に1度の開催の体験型プログラム。プロの仕事に実際に触れ、専門家から直接教わりながら、自ら考え、自分たちの手で子どもしか入ることのできない夢のまちをつくりあげる。

© 伊東かおり



甲賀 雅章 (こうが・まさあき)

1951年静岡市生まれ。1991年株式会社シーアイセンターを設立。広義の意味でのデザイン、文化戦略を、21世紀型経営の最重要資源として位置づけ、企業、組合、商店街、地方自治体等の活性化におけるコンサルティング活動を展開。2012年4月から大阪府立江之子島文化芸術創造センターの館長を務めるとともに、大道芸ワールドカップin静岡のプロデューサー、バンコクで開催されるSiam Street Festのプロデューサー、「大阪国際児童青少年アートフェスティバル」プロデューサー、劇団KIOの事業統括プロデューサーとしても精力的に活動する。



永田 宏和 (ながた・ひろかず)

1968年兵庫県生まれ。企画・プロデューサー。1993年大阪大学大学院修了後、大手建設会社勤務を経て、2001年「iop都市文化創造研究所」を設立。2006年「NPO法人プラス・アーツ」設立。2012年8月よりデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)の副センター長を務める。主な企画・プロデューサーの仕事に、「水都大阪2009・水辺の文化座」、「イザ!カエルキャラバン!」(2005～)、「地震EXPO」(2006)、「ちびっこうべ」(2012,2014)など。

年表とともに振り返る、二人のプロフィール

まさに紆余曲折を経て現在に至る、お二人のこれまでの年表を振り返ります！

- 1 **1950-60年代後半**
駄菓子屋の小作として、厳しい祖母と温かな母の元で地味に育つ。高校生になって社会権力に対して反抗活動を続ける。東京では、今と言うフリーター生活を送り、本人は遊学を気取る。何の夢もなく、長男というだけで、帰宅。
- 2 **1970年代中盤**
一年間のデザイン丁稚奉公の後、静岡市内でデザイン事務所設立。企業に売り込む「デザイン行商」に精を出し、時代の流れに乗って事務所を成長させる。その後、当時、デザインの世界では珍しかった株式会社を静岡市・浜松市で起業。
- 3 **1980年代**
フリーに戻ったり、コンサルタントとして活動したりなどを経て、再びデザイン事務所を設立。一時は社員25人以上を抱え、高額所得法人に仲間入り、全国デザイン事務所ランキングでも上位入り。この頃から、いち早く自己申告年俸制を導入、ユニークな経営者として注目を浴び、NHKの経済番組や経済誌等に紹介される。
- 4 **1980年代半ば**
バブル全盛、7色のジャケットを日替わりで着こなし、年取も過去最高。乗りに乗った日々を過ごす、ある日ふと鏡をのぞき、自分が最悪に嫌な奴の顔をしていることに気づく。「40歳に過ぎたら自分の顔に責任を持つ」というリンカーンの言葉を思い出して果敢としながら、あえて今までは逆の路線で行ってみようと考え、ずっと断り続けていた青年会議所に入所。



- 5 **1980年代終盤**
日本青年会議所個性あるまちづくり委員会の活動で街づくりに興味を抱く。積極的に欧米を視察、CI手法によるまちづくり、広義のデザイン＝ソーシャルデザイン、芸術・文化の重要性に開眼する。
- 6 **1980-90年代**
街の様々な場所を舞台に見立て、あらゆるジャンルのパフォーマンスアートを見せる静岡野外文化祭を開催。後の「大道芸ワールドカップIN静岡」につながる。
- 7 **2012年**
大阪府立江之子島文化芸術創造センター(enoco)オープン。館長に就任。大阪での活動を開始。大阪3年目、63歳の現在、現代人のコミュニケーション向上の糸口としてのパフォーマンス・アーツに可能性を感じ、自ら挑戦。2014年5月に二人芝居、9月にダンスとパフォーマンスアートの初舞台を踏み、アーティストとしてデビュー。



enoco

大阪府立江之子島文化芸術創造センター

Enokojima Art, Culture and Creative Center, Osaka Prefecture

従来の既成概念や仕組み、方法論に縛られることなく新たな価値を創造・発信し、アートやデザイン力で社会や地域、人々が抱える様々な問題や課題を解決して果敢としながら、あえて今までは逆の路線で行ってみようと考え、ずっと断り続けていた青年会議所に入所。



- 8 **1980年代終盤**
大学では建築を学ぶ。大学3年生のとき、安藤忠雄、磯崎新など巨匠たちの作品に憧れ、設計演習に取り組むが、自分の意匠的デザインセンスの乏しさに失望し、挫折。ちょうどそのころアメリカから導入されたアーバンデザインに出会う。卒業研究は六甲アイランドの景観について。
- 9 **1980年代終盤～90年代初頭**
大学院では恩師の影響もあり、都市計画・住民参加のまちづくりに関わり始める。有志の学生が集まる「都市デザイン学生研究会」初代会長を務めたり、大阪でのまちあるきイベントの運営に携わったりなど、課外活動も充実。研究室ではまちづくりコンサルタントの基礎を叩き込まれる。
- 10 **1990年代初頭**
就職のことを考え始める。はじめはまちづくりコンサルタント志望で、さまざまな事務所でアルバイトをしてみるも、ピンと来ず。恩師のすすめでゼネコン大手に入社。自由な社風の中、設計部から営業部、まちづくりコンサルタント会社への出向も経験し、さまざまな部署で勤務する。会社は面白かったが日々の生活に何となく物足りなさを感じ、「都市デザイン学生研究会」の社会人版「パートナーシップ研究会」を結成。商店街の活性化プロジェクトから落選したコンペの自主講評会まで、再びさまざまな課外活動に取り組む。このころから現代美術にも傾倒し、アートイベントのプロデュースにも取り組み始める。
- 11 **2001年**
8年間勤務した会社を退職。まちづくり、店舗プロデュース、アートイベントの企画プロデュースの3本柱を軸に独立。3年ほどは鳴かず飛ばずで、奥さんからは「もう貯金無いよ」宣言。業者としての下請け仕事の誘いは何回かあったが、ここで負けたらあかん、と断り続ける。



- 12 **2005年**
企画プロデュースしてきたプロジェクトの実績が評価され、神戸市から「震災10周年事業の企画をしてみないか」と声がかかる。アーティスト・藤浩志と共同で、楽しみながら学ぶ新しい形の防災訓練プログラム「イザ!カエルキャラバン!」を開発。神戸市内7か所で開催、延べ8,000人以上のファミリーを動員する。
- 13 **2006年**
NPO法人設立。
- 14 **2012年～現在**
デザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)オープン、副センター長に就任。



© 伊東俊介

KIITO:

デザイン・クリエイティブセンター神戸
DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

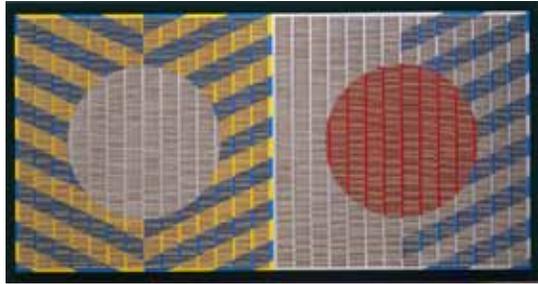
神戸市中央区の新港地区の旧神戸生糸検査所を改修し、ユネスコ創造都市ネットワーク「デザイン都市・神戸」の創造と交流の拠点として、2012年8月に開館しました。この施設でかつて生糸の品質検査を行っていた歴史にちなみKIITO(きいと)という愛称で呼ばれています。KIITOでは「+クリエイティブ」をコンセプトに、既成概念にとらわれないアイデアや工夫を採り入れて、身の回りの社会的課題を解決していく様々な活動を展開しています。





これからのイベント情報

「学芸員N」が出会った大阪府20世紀美術コレクション
眼と心とかたち



森口宏一「作品」

1974年から2007年にかけて大阪府が収集した「大阪府20世紀美術コレクション」。関西ゆかりの作家の作品や、大阪トリエンナーレの受賞作品を中心とする収蔵作品の総数は約7800点に及びます。

欧米の現代美術界からも高く評価されている「具体美術協会」、新しい抽象表現を模索した芸術家集団「テムポ」をはじめ、「パンリアル」「デモクラート」など、現代美術を振り返るうえで欠かせない動向が関西には数多くありました。また、国際コンクールである「大阪トリエンナーレ」には、欧米のみならずアジア、アフリカを含む世界各国の作家の作品が集まっています。本展覧会では、大阪府の収集の歴史を見守りつづけてきた「学芸員N」こと中塚宏行主任研究員により切り取られた、関西美術の一側面をご紹介します。

—
| 展覧会 |
開催期間：2015年3月20日(金)～4月4日(土)
11:00～19:00※月曜休館
会場：4階ルーム1・2・3、入場料：無料
| スペシャルトーク |
3月28日(土) 17:30～18:30、参加費：無料
建畠哲(京都市立芸術大学学長/前国立国際美術館長)
×中塚宏行(大阪府文化課主任研究員)

エキシビジョンカレンダー

くわしくはホームページをご覧ください
<http://www.enokojima-art.jp/>

enoco×タチヨナ「オヤトコエノコ」第1弾
モシモ人形を作ろう！～ワタシのボクの分身人形～



「オヤトコエノコ」は親と子どもが互いに関わりながら作品を作りあげていくアートワークショッププログラムです。今回のプログラムでは、子どもは「自分がもしも〇〇だったら」と想像して「自分とは似ているけれど、どこかちょっと違う自分」「今の自分には全くないものを持っている自分」である「モシモ人形」を作ります。一方、親は子どもが作る「モシモ人形」の性格などをワークシートに沿って子どもにヒアリング、人形のキャラクターを設定し、最後のプレゼンタイムでお披露目します。

さて、自分の分身ってどんな人形ができあがるのでしょうか？自分の子どもが作った「分身」のキャラクターはどんなものになるのでしょうか？親子で「モシモ人形」を作ってみましょう！

—
開催期間：2015年1月31日(土)
14:00～16:30
会場：マーク20(enoco横のマンション)1Fマークスタジオ
定員：20組(要事前申込)
対象：小学生とその親(必ず親子ペアでご参加ください)
参加費：無料
講師：菊川法子(立体イラストレーター)

1月

6日(火)～11日(日) 政経文化画人会[ルーム1]
10日(火)～24日(土) enoco[study?]#2 堀川すなお「解釈と行為」[ルーム2]
10日(火)～24日(土) MuDA EXHIBITION[ルーム4]
13日(火)～24日(土) 市民キュレーター展覧会[ルーム1]
27日(火)～2月1日(日) TRANS NATIONAL ART 2015 [ルーム1,2,3,4]

enoco WORKSHOP LABO.#2
美梱のいろは



昨年好評を博した、美術品梱包ワークショップを今年も開催します！
関西の美術館をはじめ様々な美術品の運送・梱包・展示を行っている、美術品梱包のプロ、カトーレック株式会社のスタッフを講師にお招きし、美術作品の状態にあわせた梱包資材の選び方、梱包方法の解説とデモンストレーションを行い、実際に梱包の体験をして頂きます。さらに、梱包された作品の運び方・重ね方のコツなど、さまざまなマメ知識も聞けるかも？
少人数制ですので、「いつもなんとなく自己流で梱包してきたものの、本当のところはどうなの？」というささいな内容も気軽に質問しながら受講していただけるサロンのワークショップです。これまで困っていたことなど、この機会にプロに尋ねて解決してしましましょう！

—
日時：2015年2月7日(土)
定員：15名
参加費：1,500円(要予約)
講師：カトーレック株式会社
※お申し込みの際に、梱包に関していつも疑問に思っていることなどがあればお教えください。ワークショップ中にできるだけお答えいたします。

2月

3日(火)～8日(日) 大阪教育大学 卒業制作展 [ルーム1,2,3]
10日(火)～15日(日) 大阪成蹊大学展覧会[ルーム1,2,3]
17日(火)～22日(日) 近畿大学文芸学科造形芸術専攻卒業制作展[ルーム1,2,3]
24日(火)～3月1日(日) 神戸医療福祉専門三田校展覧会 [ルーム2]

enocoの学校第2期 Be creative Course 2014
enocoの学校公開プレゼンテーション



クリエイティブな発想で社会について考え、自ら行動することのできる人材育成を目指して2013よりスタートした「enocoの学校」。第2期目となる今期は、地域のブランド力問題、教育問題、高齢化、食の問題、コミュニティの希薄化、など現代の大阪が抱える社会課題にフォーカスしながら、半年間/全20回に渡り、関西以外から多彩な講師陣を迎えての講義・ワークショップを行ってきました。受講生はそれぞれのチームに分かれ、課題解決のための企画立案に取り組んでいます。約半年間の集大成として、企画提案の公開プレゼンテーションを行います。

昨年開催された第1期のプレゼンテーションでは、ゲストクリティックとしてまちづくりや文化行政のスペシャリストをお招きするとともに、一般観覧者の皆さまとの質疑応答を行い、白熱した有意義な時間となりました。今回のプレゼンテーションでも、発表者のみならず参加者全員で、大阪の、また日本の未来について考え、議論することのできる場となることを期待しています。まちづくりやソーシャル・デザイン、地域振興や観光に携わっている方(企業、行政、NPO等勤務の方)や関心のある方、ぜひ足をお運びください。

—
開催期間：2015年3月28日(土)
会場：地下1階カフェ横スペース、観覧料：無料

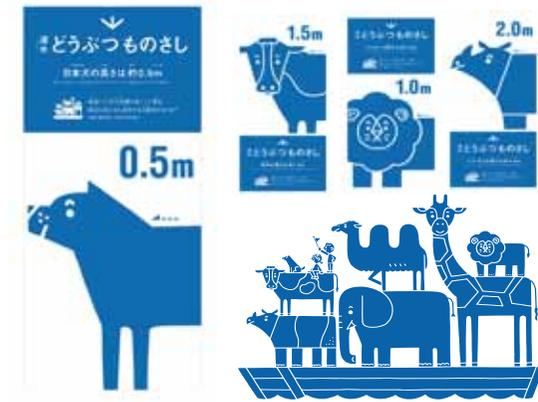
3月

24日(火)～3月1日(日) 大阪産業大学優秀作品展[ルーム4]
3日(火)～8日(日) ハート・アート展[ルーム1]
10日(火)～15日(日) 第80回 青桃会[ルーム1,2,3]
10日(火)～15日(日) アトリエぐらんず[ルーム4]
17日(火)～4月4日(土) 大阪府コレクション展「眼と心とかたち」 [ルーム1,2,3]
24日(火)～29日(日) グループ中之島絵画展[ルーム4]



これまでのイベント

グッドデザイン受賞展@東京ミッドタウン
(2014年10月31日～11月4日)



enocoニュースレター第2号でもご紹介した、大阪のクリエイターと大阪市西区により制作された「浸水どうぶつものさし」が2014年度グッドデザイン賞を受賞し、その受賞展が東京にて開催されました。グッドデザイン賞は、家電やクルマなどの工業製品から、住宅や建築物、各種のサービスやソフトウェア、パブリックリレーションや地域づくりなどのコミュニケーション、ビジネスモデルや研究開発など、有形無形を問わず、人によって生み出されるあらゆるものや活動を対象としています。「津波が起こった場合の浸水深を誰にでもわかりやすく伝えるには？」という課題を丁寧に共有しながら進められた協働の成果としての「浸水どうぶつものさし」は、「都市づくり、地域づくり、コミュニティづくり」というカテゴリーでの受賞となりました。

enocoでは今年度も引き続き、西区の創造型ラウンドテーブルのコーディネートを行っています。現在、クリエイターの皆さんと区役所職員の方々とともに取り組んでいるのは、西区の自転車駐輪問題。今後の展開もどうぞ楽しみに。

峯恵子 / enoco企画部門

わがまち文化コーディネーター講座
(2014年11月6日、7日)



近年、アートやデザインを活用した地域活性化や魅力発信の試みが増えています。enocoにもさまざまなお悩みの相談や、プランの実施に向けてのアドバイスを求める声が寄せられることも多くなりました。そういった時に感じるのは「担い手となる人材」の大切さ。そこで今回は、担い手を養成する講座を開催しました。

2日間にわたる講座の1日目は、BEPPU PROJECTの山出淳也氏ほか、さまざまな分野・地域で活躍する講師の方々をお招きしてのレクチャーからスタート。講師陣の情熱や取り組みにとっても刺激を受けた1日でした。続く2日目は「中之島GATEエリアでのアートプログラムを考える」という架空の課題を設定したワークショップを実施。約20名の参加者は屋外に出て実際に現地を確認し、イメージを膨らませたのち、4チームに分かれて企画立案に挑戦。締めくくりとして発表を行いました。

2015年2月には、参加者がいま抱えている課題や今後の展望をシェアするワークショップを行います(非公開)。また3月末には本講座の記録集を発行する予定です。

高坂玲子 / enoco企画部門

dracom祭典2014『gallery (extra version)』[筒井潤 作・演出]
(2014年9月26日～28日、10月3日～5日)



もよおす

「小便は意図せず催すものです。今回の作品は、(…)人が芸術作品に出会ったときの、言葉が誘い出される様子や、その兆しが見え隠れするとき、つまり、催している時間や空間を表現したものです。」

これは公演当日に配られた簡易パンフの中の「戯言」。統語は奇妙だけれど、ユーモアもあるこの文はやはり注意に値する。作・演出の筒井潤をリーダーに、大阪から世界へと展開する劇団dracom。20年のそのキャリアの中でも再演回数が多いといわれる『gallery』は、2011年のクリエイション²以来、さまざまなところで公演されてきた。本作(extra version)の売りは「本物の美術作品が並ぶ展示室」での上演にある。大阪府立江之子島文化芸術創造センター(enoco)をギャラリーとして、府の所蔵する「20世紀美術コレクション」の中から選りすぐられた作品が展示される。台本も一部、学芸員の解説とともにそれら逸品を鑑賞したワークショップ参加者の声から編み直されたよう³だ。

私見では、この台本の中身は3つに分類され得る。1つはそのワークショップ参加者の感想、2つには学芸員の解説らしき美術関係者(愛好家など)の見解、3つには批評家や哲学者たちの論考。これら、感じて(認知して)／解釈して(解説して)／論評する(理論化する)という諸段階の言葉が、鑑賞の現場や評論集などの書物から採集され、台本用に再編されている。そしてそれが「音声ガイド」として、上演中に会場内流れ、観客である私たちの思惟を方向付ける。

先の「小便は(…)」から始まる「戯言」に意を注げば、本作は、発露としての感想、思わず出てしまう生の言葉に比重を置いているようにも見受けられる。催されるしかなかった小便のようにとりともなく出される言葉の数々…、そしてその発話時の感覚を身振りの内に模倣しているかのようなパフォーマンス…、つまり諸々の感想(音声ガイド)とともに絵や写真の前で繰り広げられるその珍妙な動きの数々は、たとえとつとつでさえも、催されるしかなかった「ええもん見たな」という時の一あの何とも言えないざわついた感じを再現したかったのであろう。

とはいえ、私たちにとって芸術体験、言い換えれば催しは、「純粹」と言えるのだろうか。音声ガイドは、「感想」で役者を動かした後に

は、「解説」や「論考」で私たちの思惟や身構えを方向付けていた。パフォーマンスの小休止にもなり得ていたその時間は、私たちにギャラリーの中をふらつく自由を与えたが、それは同時に、私たちに「見る」ということそれ自体に潜むレファレンスやオーソリティを自覚させもした。権威ある言葉は私たちに方向付け、それらしく目の前の現象を見させようとする。

否、本当はそうした言葉に回収される以上のことが常に感覚には与えられている…とまあこういうことを考えさせる時間を、この劇は小林秀雄らの名言(「(…)新しい絵の数だけ新しい言葉が現れた(…)」⁴)などを引きながら用意していたわけだ。『gallery(e.v.』)におけるこれら言葉の戯れは、実に私たちをかき乱してくれたように思う。特に私たちを場内中自然とふらつかせた(離散集合させた)先の自由時間は、私たちのセンス(意味・方向)をしばしの間宙づりにし、会場中へと散らばらせ、皆が皆の視線により少しずつ自らを誘導してゆくように仕向けた。共通の感覚や意味(コモンセンス)というのはこうしてできてゆくものなのかと脳裏を過った人もいたに違いない。これは極めて充実した時間であり、優れた振付であった。

本作は、それに集う人がセンスの出来の場に居合わせていると感じることのできる構造を持っている。自身が他の人とともに「催す」ことの中にいるという…、考えてみれば異常ではあるが、多分これが上演芸術の面白いところなのだろう⁵。

富田大介 / 大阪大学大学院国際公共政策研究科特任講師。学術博士(神戸大学大学院)。専攻は美学、身体文化研究、ダンス。これまでジェローム・ベルやレジーヌ・ショピノの作品に出演。主な論考に「土方巽の心身関係論」(『舞踊学』第35号)等がある。大阪大学の芸術祭「声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声」では「AIR(アーティスト・イン・レジデンス)」の事業等を担当。<http://researchmap.jp/dtomita/>

1 劇団名の由来や活動の詳細についてはdracomのHPなどを参照のこと。Cf. <http://dracom-pag.org>
2 「もともと『gallery』は、横浜のblanclassというスペースのギャラリーで公演するためにつくった作品です。ギャラリーで上演するにあたって、ベタに美術作品を見ている人を題材に新作を作ろうということになり、あらかじめ録音した音声ガイドの形でストーリーが進むという作品になりました。初演の脚本にはモネとか、ムンクとか、誰でも知っている有名な作品の評論テキストを大幅に引用していて、舞台装置として絵画の代わりに鏡を置いています。お客さんはその有名な作品を頭の中で思い浮かべながら、音声に合わせて動く俳優を見るという感じになる(…)」(Cf.『enocoニュースレター』03、2014年10月発行、3頁)
3 「(…)今回enocoの展示室で再演するにあたって、本物の、しかも現代の美術作品と同じ空間で上演するとなったら、これまでと同じというわけにはいかない。なかには新しくまだ評価が定まらされていない作品すらあったりするわけで、それに対して僕が勝手に何か書くのではつたないかと思ったんです。かといって学芸員やプロの方にすべてのテキストをお願いするかっていうと、それも違うと感じました。なのでワークショップを聞いて、作品を見た感想を僕じゃない誰かに話してもらおうことによって、意外な言葉をたくさん集めようと考えました。実際に3回ワークショップをやってみて、当然ながら面白さも難しさもあったんですが、僕一人では絶対に思いつきようもない言葉や表情が本当にたくさん集まりました。」(Cf. *ibid.*)
4 Cf. 小林秀雄、『小林秀雄全作品22近代絵画』新潮社、2004年、178頁。
5 dracomの表現への誠実さは、元永定正の作品『黄色いチョボン』をネタにした「黄色いチョボン」の件でも証明されたと思う。ぐっさきたは筆者だけではなく、コレクションの新たな活用方法を探ることが、今回の大阪府とdracomのコラボレーションの要項だったと察するが、深い直観をもった作家に出会うなら、作品はこうも光り輝くことを目の当たりにした。